

# 春風をたどって

如月 きさらぎ かずさ 作  
かめおか あきこ 絵

1. 「旅に出たいなあ。」
2. リすのルウは、さいきん、そんなことばかり言っています。
3. 心をうきうきさせるような春風が、高い木のえだにすわったルウのしっぽをくすぐっていきます。それなのにルウは、ふさふさしたしっぽをたいくつそうにゆらしながら、たから物のことを思い出していました。



4. ルウのたから物は、風の強い日にどこからかとばされてきた、たくさんやしんです。やしんにうつつていたのは、青くすき通った海に、雪をかぶった白一色の山々、黄金にかがやくさばく。どれもルウが見たことのない、すばらしいけしきばかりでした。「それにくらべて、この森のけしきってさ、ぜんぜんわくわくしないよね。」
5. 見なれたけしきをながめて、ルウはためいきをつきます。
6. 海や雪山やさばくのことをルウに教えてくれた、森で一番のもの知りリすも、それらがどこにあるのかまでは知りませんでした。ちっぽけなりすにはたどり着くことができない、遠い遠いばしょにあるのだろう、とも言っていました。「それでもぼくは、いつかぜったい、やしんのけしきを見に行く」

んだ。」

7. そのとき、クルル、とルウのおながが鳴りました。そろそろお昼ごはんの時間です。ルウは、みがるに地上に下りて、お昼ごはんを食べる木のみをさがし始めました。

8. 「さいしょに行くのは、やっぱり海がいいな。なんていっても、とくべつきらきらしてきれいだもん。」

9. しゃしんで見た海のけしきを思いうかべながら、ルウが森の中を進んでいくと、顔見知りのノノンのすがたを見かけました。

10. ノノンは、とてもものんびりおっとりしたりすです。目をとじたままじっとしていて、ねているのかおきているのか、分からないこともよくあります。そのせいで声をかけづらいので、ルウは、ノノンと

あまり話したことがありません。

11. ノノンは今日も、ねむっているように目をとじていました。ですが、よく見ると、そのはなが、さかんにくんと動いています。ルウはそれが気になって、ノノンに話しかけてみました。

「ノノン、何をしてるの。」

「わあ、びっくりした。あのね、なんだかすてきなにおいがするんだよ。」

ノノンがおっとり答えます。ルウも、ためしにおいをたしかめて、それから首をかしげました。



「めずらしいにおいは、とくにしないみたいだけど。」

「においが弱くて分かりづらいんだよ。でも、本当にすてきなにおいなんだ。たぶん、こっちの方からしてくるんじゃないかな。」

12. ノノンには、ガサガサと近くやしげみに入っけていきます。少しまよってから、ルウも、その後についていってみることにしました。

13. 前が見えないほど深いしげみを、ルウは、草をかき分けながら進みます。すると、そのうちに、知らないにおいに気がつきました。さわやかで、ほんのりとあまい、とてもすてきなにおいです。

「ノノンは、こんなにかすかなにおいに気づいてたんだ。」

ルウはびっくりして、ノノンのせなかを見つめ

ました。

14. しげみは、どこまでもどこまでもつづいていきます。ルウはだんだんつかれてきてしまいました。前を行くノノンが足を止めるけいはありません。においのしてくる方へむかって、まっすぐに、どんどん進んでいきます。その様子はまるで、ルウが知っているいつものノノンとはべつのりすのようでした。

15. それからどれだけ進みつづけたのでしょうか。しげみがやっとなぎれたかと思うと、あざやかな青い色が、ルウの目にとびこんできました。



16. しげみのむこうにあったのは、見わたすかぎりの花ばたけでした。そこにさく花の色は、ルウが行きたいとねがっていた、しゃん海の海にそっくりな青。そのけしきのうつくしさに、ルウの口から、ほう、とためいきがこぼれました。

「すごいや。この森に、こんな花ばたけがあったんだね。」

ルウはノノンに言いました。ところがノノンは、ルウの声が聞こえなかったかのように、うっとり花ばたけに見とれています。

17. そんなノノンの様子をながめながら、ルウは思いました。ぼく一人だったら、この花ばたけを見つけることはできなかっただろうな、と。

「すごいや。」

ルウは、そうくりかえしてにつきりすると、だまって花ばたけの方をむきました。さわやかな花のにおりにつまれて、ゆったりと時がながれていきました。

18. しばらくたったところに、ノノンのんびり言いました。「そろそろお昼ごはんをさがしに行こうかなあ。ルウはどうする。」

19. そういえば、ぼくもごはんがまだだった、とルウは思いました。けれど、気づいたら、ルウはこう答えていました。

「ぼくは、もう少しここにいることにするよ。」

「分かった。じゃあ、またね。」

「うん。また話そう。」

20. ノノンを見おくった後で、ルウは、また花ばたけをながめました。  
21. やわらかな春風が、花たちとルウの毛を、さわさわとなでていきます。海色の花びらの上で、昼下がりの光が、きらきらがやいています。ルウのしっぽは、いつのまにか、ゆらゆらとおどるようにゆれています。

22. 花ばたけの空気をむねいっばいにすいこんで、本物の海もこんないいにおいがするのかな、とルウはそうぞうしました。

23. その夜、ルウは、すあなでたから物のしゃしんをながめていました。きれいだなあ、いつか行ってみたいなあ、とうっとりしながら。「だけど、あの海色の花ばたけも、とってもすてきだったなあ。」

ぼつりとつぶやいてから、ルウはふと思いつきました。

24. 「そうだ。ぼくの知らないすてきなばしょが、ほかにもまだ、近くにあるかもしれない。あした、ノノンをさそって、いっしょにさがしてみることしよう。ノノンといっしょなら、またあの花ばたけみたいないなけしきを、見つけられそうな気がするから。」

24. そんなふうに考えてわくわくしながら、ルウがねどこにねそべると、花ばたけからついてきたさわやかなおりが、ふわりとルウのはなをくすぐりました。

